本コーナーでは、一般的な国内法律事務所を飛び出して働く弁護士に、勤務の実態等を紹介していただきます。

当会会員
金塚 彩乃（57期）
●Ayano Kanezuka

1 はじめに

私は現在、ルフェーヴル・ペルティエ・ヴァンサン外国法事務弁護士事務所　金塚法律事務所外国法共同事業という、パリの渉外事務所の東京オフィスである、日本で唯一のフランス系法律事務所のパートナーをしています。弁護士としては、私のほかには、パートナーのフランス人弁護士と2名のフランス資格のアソシエイト（フランス人と日本人）が籍を置いています。私自身も、日本の弁護士の資格のほかにフランスの弁護士資格を持っています。

今回のテーマは、「飛び出せ!! 弁護士」ですが、私自身は、一度日本を離れた後に、日本に戻り、その経験を活かしながら執務しています。弁護士は飛び出すことを躊躇うことが少なくありませんが、その不安は飛び出した後にどうするのかということによるところが大きいと思います。ですので、1つの経験例として私の経験をご紹介させていただきます。

2 経歴

私は14歳の時に家族で渡仏し、現地の高校を卒業しました。日本で大学に進み、弁護士になった時は、訴訟実務を行いたかったこともあり、国内一般民事の事務所に就職をし、鍛えてもらいました。その時のボスには、言葉では伝えきれないほど感謝しています。その後、再度フランスに留学しました。

弁護士になってからフランスに行ったのは、フランス語できちんと法律用語を学び、フランス語圏の依頼者のニーズにこたえたいという思いからでした。また、小学生のころから革命期のフランスに憧れていたので、フランス革命に始まる近代の様々な憲法や法律をその本国で学びたいと思ったためです。そして留学前に調べてみると、当時日仏の資格をもって日仏関係をやっている弁護士はまだ本当に少ないし、何か自分にもできることがあるのではないかと思い、留学を思い立ちました。

フランスでは、パリ第二大学のビジネスローを専門とする修士課程に籍を置き、弁護士資格試験の準備をしながら、勉強していました。

弁護士登録の際には、パリ控訴院の絢爛豪華な法廷で厳粛な雰囲気で宣誓を行い、弁護士として職務を行うことに、改めて身の引き締まる思いがしました。

その後就職したパリの事務所では、会社法関係の仕事がメインでしたが、訴訟実務を経験することができました。パリの事務所はとても自由な雰囲気で、パートナーとアソシエイトの関係も近く、毎週金曜日にはシャンパンで乾杯をしていました。

3 日本での仕事

パリでは仕事もプライベートも充実し、かけがえのない日々を過ごすことができました。

フランスに残ることも選択肢としてありましたが、自分自身としては、やはり自分の国で弁護士をやりたいという思いもあり、帰国することにしました。

帰国後は、パリの事務所の日本オフィスでアソシエイトとして勤務することとなりました。その後、日本の法律実務の経験をさらに積みたいと考え、国内事務所に移籍しましたが、最終的に2014年に今の事務所の前身であり、帰国後勤務していた事務所にパートナーとして戻り、現在にいたります。

現在事務所で扱っている事件は様々ですが、国内事務所での経験と、パリでの留学・勤務経験を活かして、訴訟事件を扱うかたわら、フランス企業の日本進出や日本企業のフランス進出に関連する業務を多く取り扱っています。分野としては、フランス会社法・労働法・知財法・倒産法のほか、やはり税金に関する相談も少なくありません。必要とされる役回りとしては、コミュニケーションギャップを埋めるということも非常に重要です。そのためには、語学だけでなく、双方の文化や法制度を知り、依頼者が不安に思うところを先取りして、比較法的観点を含めつつアドバイスをするスキルが必要となります。

弁護士会では、今は国際委員会の委員として、パリ弁護士会と二弁の友好協定の締結をお手伝いするなど、フランス分野の担当をさせていただいています。また、互助会旅行がフランス語圏のときの通訳や、日弁連のフランス調査のコーディネートや通訳も担当したりと、弁護士会でも経験を活かすことのできる場をいただけるのは非常にうれしいことです。

フランスの18世紀以降の政治思想や革命期以降の歴史や政治を学んだことを活かして、今は慶應義塾大学法科大学院でフランス公法の授業も担当しています。

4 事務所の特色

近年フランス人のライフスタイルに関する本がたくさんでていますが、やはりこの辺りはさすがフランスという感じでしょうか。どのように気持ちよく仕事ができるかということを大切にしています。ちょっとだけ紹介すると、事務所の明かりは間接照明で、執務スペースは完全にオープンで、オペラやクラッシックをはじめジャズなどのＢＧＭを流していることが多いです。事務所入り口はアロマを焚いて、ルーフバルコニーがあるので、春から秋にかけて、お客さんや親しい弁護士の方々を招いてワインパーティをするなど、交流の機会をたくさんもてるようにしています。

5 終わりに

今こうして仕事をしながら思うのは、日本の国際化のより一層の多角化と、今までの数えきれない出会いの大切さです。

多角化という観点からは、アメリカや成長目覚ましいアジア諸国に比べ、「古い大陸」であるヨーロッパにはダイナミックさに欠ける印象があるかも知れません。しかし、長い法の伝統や司法制度、ビジネスの点からも、共通するものの多い日本とヨーロッパ諸国は、より近づけるのではないか、弁護士が担える役割もまだたくさんあるのではないかと思っています。フランスビジネスだけをとっても、非常に面白いことがたくさんありますので、若手の皆さんには自分の好きな分野で様々なチャレンジをしていってもらいたいと思います。

また、今私が自分の好きな国の自分の好きな分野の仕事ができているのは、これまでにかかわった多くの人との出会いの大切さです。多くの人に育ててもらい、出会ったからこそ、自分のやりたいことに近づいていけたと思っています。これから「飛び出す」ことを考えている若手の皆さんは、ぜひ今の状況や人とのつながりを大切にしながら、自分のやってみたいことに飛び込んで、臆せず自分の世界を切り開いていってもらいたいと思います。